

「神の慈しみの島」にて

第1次東ティモール国際平和協力隊 1等陸尉 建部 壮

東ティモール国際平和協力隊の第1次要員として派遣されて約2ヶ月が経ちました。私の勤務しているパウカウは、首都ディリから東に120km離れた場所に位置する東ティモール第2の都市で、抜けるような青い空と、南国の済んだ海が特徴の美しい街で、ポルトガル統治時代の遺構も処々残っています。

文民警察官を中心として2,000名以上が所属している国連派遣団（UNMIT）のなかで、軍事連絡要員グループは約30名という小さな所帯です。オーストラリアから派遣されている首席軍事連絡要員（大佐）の下、首都ディリ、西部国境地帯のボボナロ、南西国境地帯のコバリマ、東部のパウカウ、飛び地オエクシの5ヶ所に、各国から派遣された4～6名の将校からなるチームで勤務に就いており、一つのチームに同じ国籍の軍事連絡要員が配置されることは基本的にありません。



写真1 首席軍事連絡要員とパウカウ・チーム

チームの主な任務は、担任地域内のパトロールを行って、地域の情報を収集することです。私の勤務しているパウカウ地域は、インドネシアとの国境地帯を抱えていない一方、担任区域が非常に広く、国土の東半分にあたり及びます。幹線道路を少し外れると舗装されていない道路ばかりで、4WD車（MT）の操縦技術が必須です。また、街灯やガードレールがなく、道路も崩れていたりすることも多く、非常に危険な夜間の車両操縦を避けるため、1・2泊の予定でパトロールすることも珍しくありません。「陸の孤島」と呼ぶに相応しい山間部の村落まで出かけるにあたり、陸上自衛官としてのフットワークと野性？が非常に役に立ちます。



写真2 土砂崩れが心配な道路



写真3 渡河敢行。日本車4WDの性能に感服。



写真4 野外マーケット場にテントで宿泊

収集する情報は、治安に関するものが主になりますが、首都ディリに機能が集中しがちなUNMITの耳目としての役割も要求されています。食糧事情、水、インフラ、政治経済、教育、医療、災害対策といった項目まで、実に多岐にわたり地方の自治体や地方で活動しているNGOの代表者等からのインタビューを行います。現在政府がどのような政策を実施しているのか、国連や他の機関の活動内容、展開しているNGOの概要等、様々な前提知識が必要になってきます。



写真5 村長へのインタビューの様子

パトロールの終了後、事務所に戻ってレポートを作成します。チームとして毎日2件のレポートをディリの首席軍事連絡要員に報告するので、個人として週に3件程度のレポートを担当することになります。先に述べたUNMITの耳目としての役割上、たとえ我々軍事連絡要員が重要でないと思った事柄でも、他部署にとっては重要な情報であることがあります。したがって、基本的に要約はせず、聞き取った内容をすべて報告することになっているので、英文で2枚程度、時には10枚近いレポートになることがあります。学生時代よりも英作文に追われる毎日です。

東ティモールは独立してようやく10年というアジアで一番若い国で、まさに国造りの最中にあり、行政組織や法律、インフラの整備など、国として手探りで進んでいるという印象を受けます。また、人口の約99%がキリスト教(主にカトリック)で、どんな地方の小さな村に行っても精一杯美しく飾った教会やチャペルがあり、墓地が丁寧に清掃されていたりと、この国の人々の信仰の篤さをいたる所で感じます。



写真6 花で飾られた小さな村のチャペル

そして、各地をパトロールしていて、熱帯の花々、ポルトガル時代の遺構や海岸の美しさに息をのむことが多いです（道路状態が悪いので、とても脇見運転はできませんが）。インドネシア統治時代から東ティモールで医療活動に従事されたあるシスターは、このティモール島を「神の慈しみの島」と表現しましたが、その言葉どおり、小さい国ながらも、深い信仰と、美しい自然に恵まれています。



写真7 ポルトガル統治時代の遺構（バウカウ旧市街）



写真8 ティモール島最東端トゥトゥアラの海

この東ティモールは、今まさに独立後の混乱を抜け出し、成熟した国家として一步を踏み出そうとしているところです。まだまだ半年の任務は始まったばかりですが、UNMIT軍事連絡要員としてその一助になれることを、大変誇らしく感じています。

(平成22年11月30日)